

**第2回県史編さん企画展**  
**大正時代の出発と湖国の発展**  
**—新聞でたどる文化・社会—**

2025.1.27(月)~2025.4.24(木) 滋賀県立公文書館  
tel:077-528-3122 見学無料 閉館日：土日、祝日

▲『滋賀県管内全図』(国立国会図書館デジタルコレクション)  
左上：『坂田原のモーリス出陣』(『幕末・明治・大正回顧八十年史 第17輯』  
国立国会図書館デジタルコレクション)  
左：『大正7年8月12日京都府公設外米販売の広告』(同上)  
中央左：『歩兵第九連隊兵装』(『行啓記念』同上) 中央右：『旧花の木崎園』(『昭々40 (8-7)』)  
右：『京津電車開業広告』(『京都日出新聞』1912年8月15日)

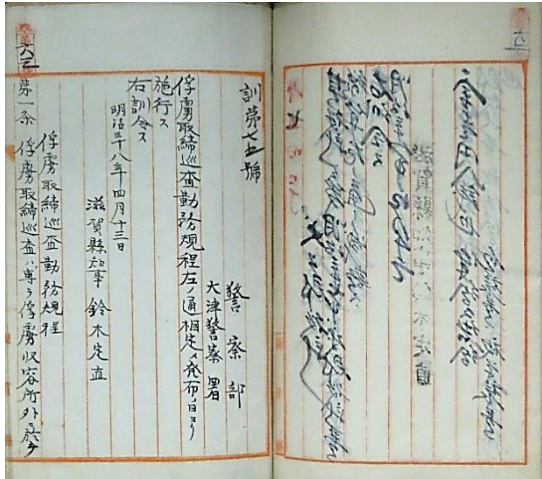
令和5年度から当館では、県史編さん事業を進めており、その資料収集の成果の一部を県史編さん企画展として発信しています。今回の展示では、日露戦争下の銃後協力から大正期の米騒動までを主に取り上げます。

日清・日露両戦争を経て日本は、大国意識をもつとともに、文化・社会の著しい発展の時期を迎えます。本県も、明治末期にはピワイチのはじまりといえる自転車競走大会や嘉仁皇太子（後の大正天皇）の滋賀巡啓が実施され、大正期に入ると京都一大津間の電車が開通するとともに、飛行場という最先端技術に関わる施設が整備されました。しかし第一次世界大戦にともなう物価高は社会不安を引き起こし、全国的な米不足が発生すると本県でも米騒動が起きました。

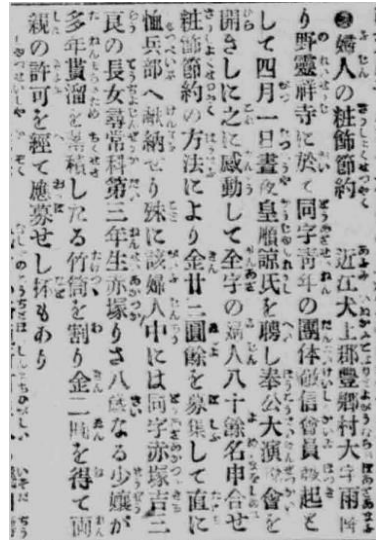
本展示では、そうした湖国の発展と新たな社会問題の発生について当時の新聞記事等を手がかりに御紹介します。

**【展示概要】**

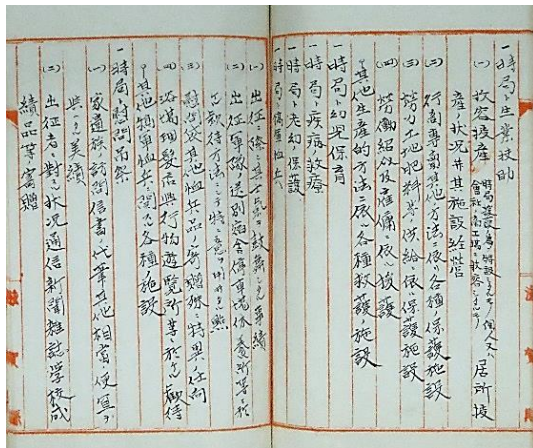
- 期間 令和7年1月27日(月)～4月24日(木)  
会場 滋賀県立公文書館(県庁新館3階)  
日時 月曜日～金曜日(祝日、年末年始を除く)  
9時～17時  
内容 新聞記事14点、滋賀県特定歴史公文書等11点  
(合計25点)



1-3 「俘虜取締巡査勤務規程」  
1905年4月13日【明い215-2 (63)】



1-1 「婦人の粧飾節約」  
1904年4月6日（『京都日出新聞』）



1-4 「滋賀県訓令第二十九号」  
1906年10月6日【明い24-1 (2)】



1-2 「金州城南門の勇士」 1904年6月19日  
（『京都日出新聞』）

### 滋賀県と日露戦争

今から一二〇年ほど前の一九〇四年（明治三七年）に勃発した日露戦争では、滋賀県もさまざまなかたちで、戦争に関与することとなりました。

銃後での戦争協力のひとつが戦時公債の購入や戦費献納でした。新聞紙上では、化粧・衣服費などの節約による献金といった県民による献納活動や戦時公債の応募額などが連日報じられています（資料1-1）。

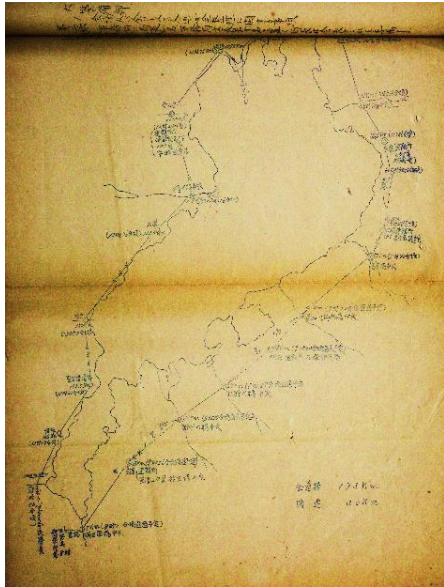
また県内からも多くの兵士が出征しました。大津市に駐屯していた歩兵第九連隊は、第四師団（大阪）に属して遼陽会戦（一九〇四年八月）や奉天会戦（一九〇五年三月）といった日露戦争中の主要な会戦に参加しました。こうした戦闘の様相も新聞を通じて、銃後の国民にも伝えられました（資料1-2）。

戦争を通じて多くのロシア軍捕虜（俘虜）が日本本土に送られてきました。こうした捕虜たちを収容するための施設が、園城寺など大津市内にも複数設けられます。収容された捕虜たちは、施設を出て活動することもあり、その警備には巡査が当たりました（資料1-3）。

そして終結の翌年、県知事は各市町村長に対して各地域における恤兵や青年団体の活動、記念事業などの調査、とりまとめを指示しました。その際、取り上げらるべき事項には、出征者に対する新聞などの寄贈も挙げられており、銃後の新聞が前線の兵士にも読まれていたことがわかります（資料1-4）。

（松本 昂也）



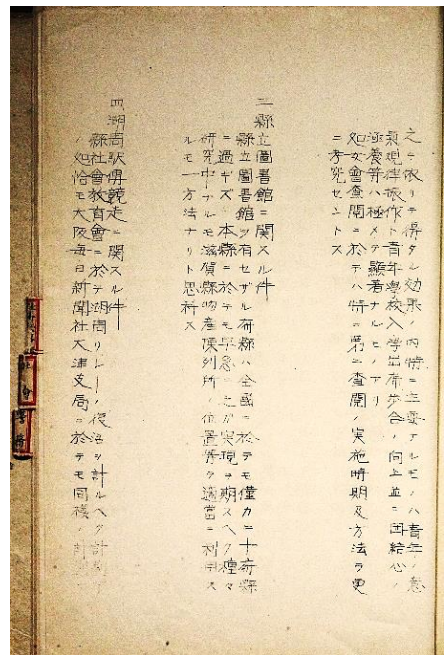


2-1 「滋賀日出自転車競走大会」1908年6月9日  
 (『京都日出新聞』)

2-3 「高松宮賜杯第1回琵琶湖一周自転車道路競走大会要項」  
 1951年5月【昭か28(16-1)】



2-4 『バイコロジー推進基本構想—自転車社会をめざして—』  
 1980年9月(滋賀県蔵)



2-2 「湖周駅伝競走に関する件」  
 1935年【昭き13-2(13-4)】

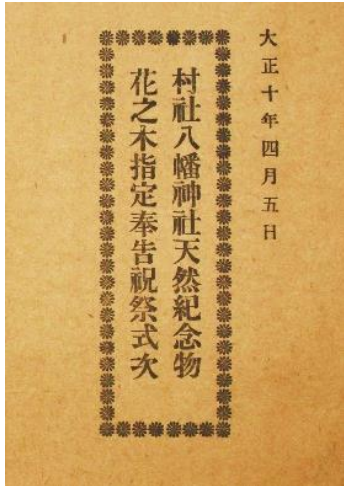
“ビワイチ”の起源

自転車は明治の中頃から普及しました。一九〇八年(明治四一年)、滋賀日出新聞社(京都日出新聞社(現・京都新聞社)傘下)が自転車競走大会を開催します(資料2-1)。これは現在確認できる最初の「琵琶湖一周」を冠した大会です。当時は長浜から今津までは汽船を使つて琵琶湖を一周しました。

一九一九年(大正八年)に滋賀県知事となった堀田義次郎は湖周道路を予算化し、また、琵琶湖一周リレー大競走会の開催を提唱します。この大会は一九一九年から一九二四年まで毎年開催され、その後は一時中断されたものの、一九三五年(昭和一〇年)に復活しました(資料2-2)。

戦後、滋賀県におけるアマチュア競走大会として、高松宮賜杯琵琶湖一周自転車道路競走大会が開催されます。全国的にみても規模が大きく、競技者の目標となったレースでした(資料2-3)。

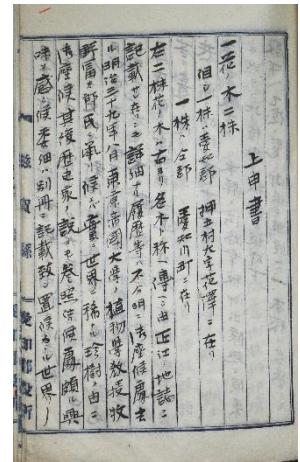
その後、琵琶湖の赤潮発生などをきっかけに環境保護への関心が大きく高まるなか、武村正義知事は「滋賀県バイコロジー推進基本構想」を掲げ、琵琶湖一周自転車道の整備などを提言しました(資料2-4)。バイコロジーとは Bike と Ecology とを合成した言葉で、環境のために自転車利用を促進しようとする運動です。民間でも滋賀県バイコロジーをすすめる会が発足し、官民一体の運動が現在のビワイチへとつながっていきます。  
 (吉水 希枝)



3-5 「村社八幡神社天然紀念物  
花之木指定奉告祝祭式次」  
1921年4月5日  
【大せ35(31)】

と只管御禮を申上たりと▲陛下愛知郡の産にて俗に「花の木」と稱する珍木あるがこは知事さへ殆んど知らぬ位なりしに万事に御留意遊さるゝ陛下には先早くも御眼を注がせられ「これは印度及び亞弗利加等に産して他には無き木ぞ」とて非常に珍重がらせ給ひ東京なる青山御所の御庭へ移植したしと仰られたるも何分にも大木のことにて今俄かに如何ともする能はざりしかば幸ひ有馬侍従が農藝士なるより同侍従に命じてこの木の事共を調べさせられ幾分御侍従の上御栽培に至る御答なりと

3-2 「東宮御盛徳」1910年10月11日  
（『京都日出新聞』）



3-1 「上申書」1910年9月22日  
【明ふ46-3(21)】

●川嶋知事「花の木」献上  
島滋賀縣知事は十二日朝東京に着し直ちに東宮御所に奉伺し「花の木」献上の手續を爲したるに陛下は特に拜謝を賜ひ優渥なる御言葉あり滋賀縣下に於ける小學教育の状況及本年農作物豊凶如何等委しく御下問あり殊に江州は水産の増殖を期すべしとの御言葉もあり知事は感涙に陥ひて退出せりと

3-4 「川島知事『花の木』献上」  
1911年11月13日  
（『京都日出新聞』）

●東宮へ献上の珍木  
殿下滋賀縣下御巡啓の際愛知郡東押立村寺院及村社に古來花の木と稱する珍木ある由御聞に達し川島知事に命じて該枝を取寄せさせられ親しく御賞感ありしが其後川島知事は今井同郡長に命じて那模範農場其他小學校等に於て花の木を挿し芽として百數十本栽培せしめたる處中三本成長したれば鉢に移植し去る九月十二日辰見郡視學該二鉢を擁して縣廳に持参せしが以來川島知事は縣廳庭園にて栽培に餘念なく慥かに生き附きたるらしく芽を出せしより來る十日より開設すべき臨時縣會閉會を待つて早々東上し東宮御所に獻納の手續を爲すべしと云ふ

3-3 「東宮へ献上の珍木」  
1911年11月7日（『京都日出新聞』）

嘉仁皇太子の巡啓と「花の木」献上

嘉仁皇太子（後の大正天皇）の滋賀県巡啓が、一九一〇年（明治四三年）一〇月に行われました。これに際し、滋賀県の郷土史家である中川泉三は、愛知郡東押立村（現・東近江市）にある「花の木」の写真などを皇太子に観覧いただけよう、願ひ出ます。これは、中川が「花の木」は古代の歴史を研究する上で貴重な植物であると考えたためです（資料3-1）。そして、この希望は聞き届けられます。実際に「花の木」の枝や写真を観覧した皇太子は関心を示し、青山御所への移植を希望します（資料3-2）。

その結果、差し芽によって分木することが決まり、愛知郡模範農事試験場などの施設で培養されます。そのうち成長した二鉢が県庁の庭園で栽培され、無事に芽が出ると、皇太子へ献上する運びとなつたのです（資料3-3）。そして一九一一年一月二日に「花の木」の分木が川島純幹知事より献上されます。その際、皇太子から小学校教育や農業の状況についての質問や、水産業に力を入れるようにとの発言があつたそうです（資料3-4）。

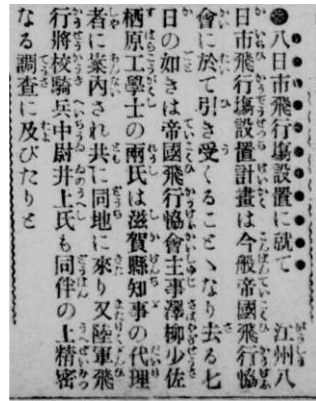
その後、一九二二年（大正一〇年）三月に、南花沢と北花沢の「花の木」がそれぞれ国の天然紀念物に指定されました。これを記念して、同年四月五日に同村八幡神社にて当時の知事や県選出衆議院議員、県会議員なども出席した指定奉告祝祭記念式典が開催されました（資料3-5）。

（山口一樹）



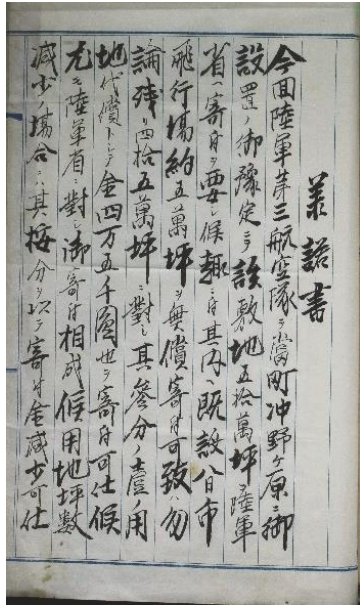






5-1 「八日市飛行場設置に就て」

1915年1月10日 (『京都日出新聞』)



5-3 「承諾書」1918年5月2日

【大お5 (8)】



5-2 「八日市と陸軍飛行場」

1916年8月30日 (『京都日出新聞』)



5-4 「飛行場沖野ヶ原」1919年5月8日

(『京都日出新聞』)

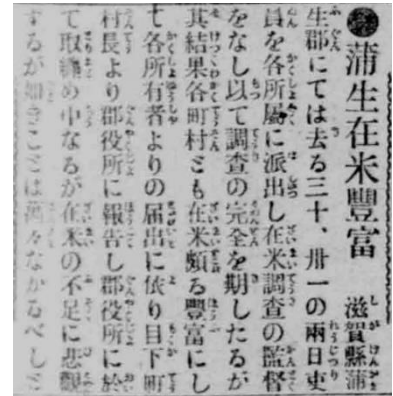
### 八日市飛行場の歩み

一九一四年(大正三年)九月に、愛知郡八木荘村(現・愛荘町)出身で、フランスに渡って飛行技術を学んだ荻田常三郎が、八日市町南東部の沖野ヶ原を発着場に、郷土訪問飛行を行いました。これを契機に、八日市では、飛行場開設の計画が進められることになります。

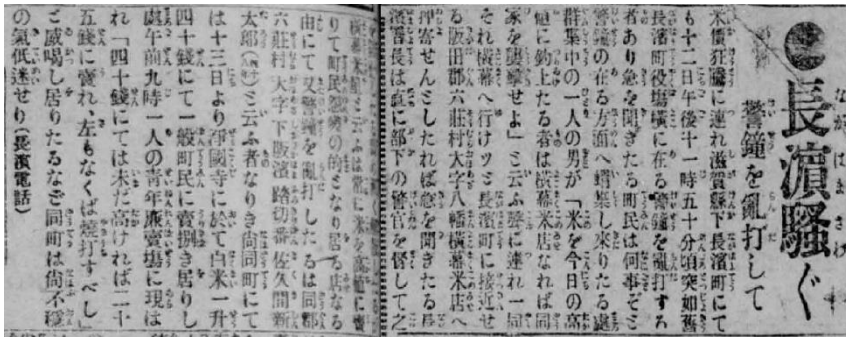
一九一五年一月七日には、日本での航空機の普及・発達を目的とした帝国飛行協会が、沖野ヶ原を視察しました(資料5-1)。これは八日市が、同協会に開設作業を委ねていたためです。そして工事が開始され、同年六月に五万坪の飛行場が沖野ヶ原に完成します。

しかし、飛行場運営に行き詰まった町当局は、陸軍飛行場への転換を構想し、飛行場やその他必要な土地を献納することを計画します(資料5-2)。県も加わった働きかけの結果、一九一八年に政府から航空第三大隊設置の内諾が出ました。用地には、五〇万坪の広大な土地を充てることになりましたが、その費用は八日市町だけで賄えるものではありませんでした。そのため、森正隆知事から、八日市町以外に蒲生・神崎両郡、そして県も費用を負担する案が出され、町側もこれを承諾しました(資料5-3)。

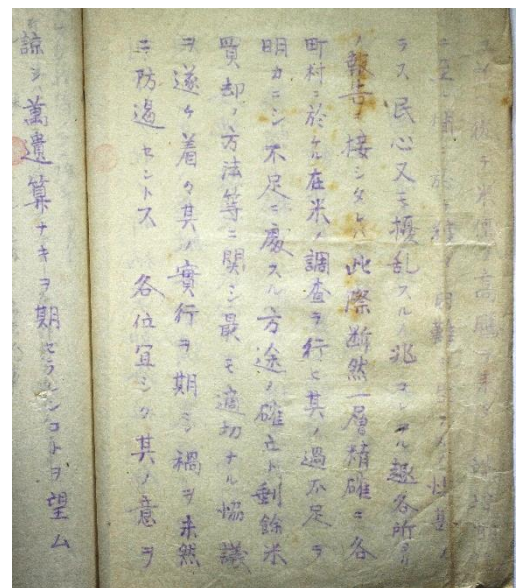
そして、一九一九年六月に費用と土地の用意が完了、翌年三月に、五〇万坪が陸軍用地となりました。一九一九年五月の新聞では、飛行場をめぐる沖野ヶ原の歩みが振り返られ、近いうちに軍用飛行機が翔け回るのであることが記されています(資料5-4)。(吉原 徹平)



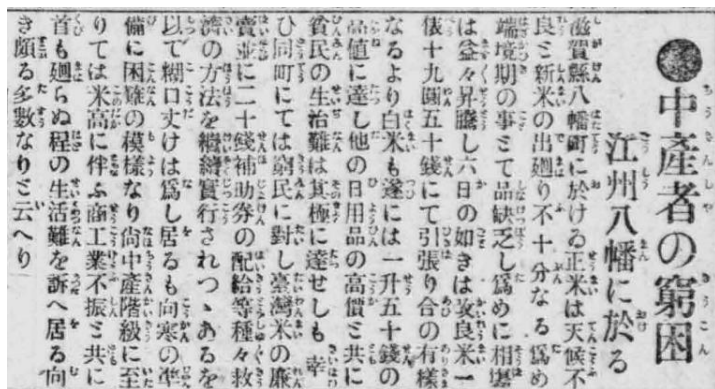
6-1 「蒲生在米豊富」  
1918年8月6日（『京都日出新聞』）



6-2 「長濱騒ぐ」1918年8月14日  
（『京都日出新聞』）



6-3 「郡市長会議資料」  
1918年8月27日【大ふ55（19-4）】



6-4 「中産者の窮困」1918年10月8日  
（『京都日出新聞』）

### 滋賀県の米騒動

一九一四年（大正三年）に第一次世界大戦が勃発すると、日本は未曾有の好景氣を迎えましたが、物価が急上昇したため、庶民の生活はかえって苦しくなりました。特に米の値段が高騰したため、一九一八年夏に「米騒動」と呼ばれる大規模な暴動が全国各地で発生するに至ります。

滋賀県は米の主要産地だったので他府県よりは比較的米の在庫が豊富だったようです（資料①）。しかし、八月一日頃に京都・大阪・神戸などで大規模な暴動が発生すると、県内も不穏な状態になります。

一二日の深夜、長浜では警鐘を打ち鳴らし、集まってきた町民に米価を釣り上げている米屋を襲撃しようとして訴える人が現れました（資料②）。この事件は警察の制止で暴動に発展しませんでした。各地で同様の事案が散発しました。

このような事態をうけて、県は安い外国米の調達や寄付金を募集することで、市町村による米の廉売を支援しました。八月下旬には「民心又も擾乱するの兆」があるとして、米の県外への移出を制限しました（資料③）。新聞記事からは、新米の流通が遅れたため、秋になっても公的な救済策によって人びとの生活がどうか支えられていた様子がわかります（資料④）。結果として、滋賀県で大規模な暴動は発生しませんでした。しかし、米騒動の影響は大きく、以降このときの経験をふまえて、行政による社会事業が展開していきます。

（堀雄高）



【展示関連年表】

西暦	元号	月	日	出来事	図録
1894	明治 27	3	15	京津電鉄と京都電鉄の間に契約が結ばれる	4-1
1904	明治 37	2	10	日本、ロシアに宣戦を布告	1-1
1904	明治 37	5	25~26	南山の戦い	1-2
1905	明治 38	3	23~24	大津にロシア軍捕虜 1500 名が到着	1-3
1905	明治 38	9	5	ポーツマス条約発効、日露戦争終結	1-4
1906	明治 39	4	—	再出願した京津電鉄、京都電鉄による合同提案を拒否	4-2
1906	明治 39	9	22	内務省の勧告に基づき、京津電鉄と近畿電鉄の合同が成立	4-3
1907	明治 40	1	24	内務省、三者合同による京津電鉄設立の申請を認可	4-4
1908	明治 41	6	9	滋賀日出新聞社主催琵琶湖一周自転車競走大会開催	2-1
1910	明治 43	10	6~8	嘉仁皇太子の滋賀県巡啓	3-1・2
1911	明治 44	11	12	川島純幹知事、「花の木」を献上する	3-3・4
1912	大正元	8	15	京津電車開業	
1915	大正 4	1	7	帝国飛行協会が八日市町南東部の沖野ヶ原を視察する	5-1
1916	大正 5	8	—	八日市町にて飛行場を陸軍飛行場に転用する運動が動き始める	5-2
1918	大正 7	5	—	政府より八日市に航空第三大隊を設置する旨が通知される	5-3
1918	大正 7	8	6	滋賀県蒲生郡の在米は豊富と報道される	6-1
1918	大正 7	8	12	深夜、長浜町で米屋襲撃未遂事件が起こる	6-2
1918	大正 7	8	27	県と郡市長の会議開催、米の県外への移出制限を協議	6-3
1918	大正 7	10	—	新米の流通が遅れるなか、八幡町では米の廉売が継続される	6-4
1921	大正 10	3	3	「花の木」が天然記念物に指定される	3-5
1922	大正 11	1	11	陸軍航空第三大隊開式挙行	5-4
1935	昭和 10	11	1	琵琶湖一周駅伝競走大会開催、湖周リレー復活	2-2
1951	昭和 26	5	20	第一回高松宮賜杯琵琶湖一周自転車競走大会開催	2-3
1980	昭和 55	9	—	武村正義知事が滋賀県バイコロジー推進基本構想を掲げる	2-4

《参考文献》

展示図録 大正時代の出発と湖国の発展  
—新聞でたどる文化・社会—  
令和 7 年（2025 年）1 月 27 日

編集・発行

滋賀県立公文書館

〒520-8577

滋賀県大津市京町四丁目 1 番 1 号

滋賀県庁新館 3 階

Tel : 077-528-3122

Fax : 077-528-4813

Mail : archives@pref.shiga.lg.jp

- ・奥井清弘『八日市と飛行場』（八日市飛行通信社、1922 年）
- ・井上清・渡部徹編『米騒動の研究』第 2 巻（有斐閣、1959 年）
- ・『鉄路五十年』（京阪電気鉄道株式会社、1970 年）
- ・『新修大津市史』第 5 巻（大津市、1982 年）
- ・『八日市市史』第 4 巻（八日市市役所、1987 年）
- ・『滋賀県体育協会史』（滋賀県体育協会、1989 年）
- ・中島伸男『颯風号が空を飛んだ日』（芳文社、1992 年）
- ・小川功「大津商人による鉄道発起と挫折」（『滋賀大学附属史料館研究紀要』第 30 号、1997 年）
- ・『史学は死学にあらず』（中川泉三没後七〇年記念展実行委員会事務局、2009 年）
- ・中島伸男『陸軍八日市飛行場 一戦後 70 年の証言—』（サンライズ出版、2015 年）
- ・大月英雄『「未発」の米騒動』（滋賀県立公文書館編『歴史公文書が語る湖国』サンライズ出版、2021 年）
- ・南村多津恵「滋賀 市民発の、ツーリズムによる自転車まちづくりの展開」（宮田浩介編『世界に学ぶ自転車都市のつくりかた』学芸出版社、2023 年）
- ・浜田幸絵「自転車競走のメディア史」（『メディア史研究』第 56 号、2024 年）